

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは「与えること」が利他だと思い込んでいます。だから「何かいいことをしよう」として、時に相手を傷つけてしまうのです。これが利他の持つ「支配」や「統御」という問題ですね。

利他が起動するのは「与えるとき」ではなく「受け取るとき」です。これは重要なポイントです。

では、①「利他を受け取る」とはどのような状態なのでしょうか。

わかりやすいのはプレゼントをもらって「うれしい」と感じるときです。相手が自分のことを大切に思ってくれているとわかり、ジンとなることがあります。これは贈与の受け取りが成功していますよね。

ただし、先にも述べたように、少し時間が経つと、②この贈与は負債感につながる場合があります。自分も相手に同じぐらい価値のあるものを返さなければならぬと思います、それができないでいると「負い目」を感じて、相手との関係がおかしくなってしまうことがあります。場合によっては、「与えた人」と「受け取った人」の間に優劣関係が生じ、時に支配／被支配の関係を構築してしまいます。これは問題ですよ。

※「ちばる食堂」や「NHKのど自慢」で見たように、利他は相手の個性に沿い、ポテンシャルが引き出されたときにこそ生まれるという構造があります。だとすれば、私たちが「受け手」となって利他が起動するのは、相手の行為によって自己の能力が引き出され、主体性が喚起されたと感じたときではないでしょうか。

私は年齢を重ねてから、中学校時代の先生のことを思い出して、「あのときの先生のおかげで、今の自分があるのではないか」と思い、感謝の念が湧いてくるようになりました。

中学一年生になったばかりの頃、私は上級生とけんかをし、相手を思いっきり殴ってしまいました。私にはけんかに至った

③プロセスに言い分がありました。相手の上級生は、当時流行っていた漫画（『せいんとせいや聖闘士星矢』の戦闘シーンを再現するために、下級生の私に暴力的な「技」をかけてきました。はじめは遊び半分じゃあっている感じでしたが、次第に、相手の力が強くなり、私が「痛い！」と言ってもやめてくれなくなりました。

何度も「やめてほしい」と言ってもやめようとしぬ相手に対して、私はカッとなり、思いっきり殴りつけました。さらに、倒れた上級生に馬乗りになり、殴りました。すぐに周りにいた同級生が止めに入ってくれたおかげで、大けがを負わせるような惨事にはなりませんでしたが、上級生の顔は腫れてしまいました。

そのとき、私は担任の先生に呼び出され、みんなの前でこっぴどく叱られました。私はうつむいてうなだれるしかなく、相手に頭を下げて謝りました。④あまりにも悔しくて、目から涙がこぼれました。

その後、先生は私を別室に連れていきました。そして、私にやさしく言いました。「中島君の言い分はよくわかる。発端は上級生に非があることは明らかだ。しかし、相手を殴ってはいけません。相手を振り払ったうえで、なぜ自分は嫌なのかを説明し、やめるように説得しなければならぬ。周りの上級生や同級生に（Ⅰ）を求めたこともしなければならぬ。中島君の正義感がよくわかる。しかし、（Ⅱ）で解決してはいけません。言論によって解決しなければならぬ。君はしっかりと勉強をして、（Ⅲ）によって解決できる方法を身につけなさい」

先生は私の特質をよく見てくれていたのか、部活は体育系に入るのをやめて、「社会科部」という文科系のクラブに入るよう勧めました。このクラブは部員がおらず、休部状態になっていたのですが、顧問はこの先生でした。私は言われるまま「社会科部」に入部し、部長として活動を始めました。私は大阪生まれの大阪育ちで、当時は大阪市内の中学校に通っていました。そのため、大阪の歴史に関心を持ち、史跡などを訪ね歩くようになりました。中でも、古墳への関心が強く、夏休みの自由研究として、原稿用紙百枚ほどの原稿を書いたりしました。

私に関心を持ったのは、前方後円墳のような巨大古墳ではなく、古墳時代後期に盛んに造られた群集墳というものでした。これは狭い範囲に小さな古墳が密集しているもので、大阪東部の山の傾斜地に多く存在していました。私は休みの日になると、一人でこの古墳を見に出かけ、ひたすら古代人の死生観について考えを巡らせました。かなり変わった中学生ですよ。

その後、私の古墳ブームは受験勉強と共に過ぎ去り、「社会科部」の記憶も薄れていたのですが、大学院に入り研究者を目指して調査をしていた頃、ふと中学校の先生のことを思い出しました。

私が歴史上の重要な場所を歩き回り、調査を重ねるスタイルの原点は、明らかに中学校時代の「社会科部」にあり、そのきっかけは、先生からの「一言」にある。⑤私の潜在的なものを引き出してくれたのは、あの先生だったんだ。そのことに思い至り、先生に対して感謝の念がふつふつと湧いてきました。

——「君はしっかりと勉強をして、知性によって解決できる方法を身につけなさい」

粗暴な中学生の私に、よく言ってくださったと思います。今から振り返ると、このときの「一言」が、研究者として文章を書くことになる私の原点だと思います。本当にありがたいと思っています。

しかし、私は先生が言ってくれたことを、中学生のときはちゃんと受け取ることができていませんでした。言われたことの意味をしっかりと理解できておらず、先生に言われるままに「社会科部」に入っただけのことでした。しかし、そのことが私の道をひらいてくれました。そして今の自分がいます。

先生のメッセージをしっかりと受け取ることができたのは、ずいぶんと時間が経ってからのことでした。先生の言ってくれたことの大切な意味に気づくまでには、長い時間がかかりました。

さて、私をめぐって起きた「あのときの一言」の構造を考えてみたいと思います。

私が先生の「一言」を、しっかりと受け取ることができたのは、十年以上経ってからのことでした。先生が言葉を発した時点では、私は言葉を受け取り損ねています。先生に言われたことよりも、みんなの前で叱責されたことのほうが悔しく、嫌な思い出して残っていました。

A、先生の一言は、無意識のまま自分の心の中に沈殿していきました。そして、私の未来を切りひらいてくれました。

先生は私の恩人です。先生の一言は、私にとって「利他的なもの」に他なりません。しかし、そのことに気づいたのは、言葉が発せられたときではなく、それから長い年月を経たあとでした。

B、受け手が相手の行為を「利他」として認識するのは、その言葉のありがたさに気づいたときであり、発信と受信の間には長い⑥タイムラグがあります。ここに「利他」をめぐる重要なポイントがあります。

「利他」は、受け取られたときに発動する。この原理は、次のように言い換えることができます。

——私たちは他者の行為や言葉を受け取ること、相手を利他の主体に押し上げることができる。

⑦ 私たちは、与えることによって利他を生み出すのではなく、受け取ることによって利他を生み出します。 **C**、利他となる種は、

すでに過去に発信されています。私たちは、そのことに気づいていません。しかし、何かをきっかけに「あのときの一言」「あのときの行為」の利他性に気づくことがあります。私たちは、ここで発信されていたものを受信します。そのときこそ、利他が起動する瞬間です。発信と受信の間には、時間的な隔たりが存在します。

私は時を経て、大学の教員になりました。教員人生ももう少しで二十年になろうとしています。

この間、いろいろな学生に出会い、学びを共にしてきました。そして、多くの学生たちが、様々な分野で活躍してくれています。教員は、卒業生の活躍を見るのが一番の幸せです。これは、教員になって初めてわかったことでした。

卒業生と久しぶりに会うと、時折、思いがけない言葉に出くわします。卒業生に「あのとき、先生が言ってくれたことが、自分の人生をひらいてくれました」と言われることがあるのです。

私は多くの場合、「えっ」と言い、⑧キツネにつままれたような表情になってしまいます。なぜかというところ、私は自分の言った言葉を、ほとんどの場合、覚えていないからです。

「私、そんなこと言ったっけ」と言うところ、「言いましたよ。覚えてないんですか」と呆れられ、苦笑いされます。自分の記憶力の悪さに反省するしかないのですが、私としてはあまりにも日常の何気ない一言のため、記憶に残っていないというのが正確なところ。私の一言は、発信者の思いや意図を超えて受け取られているのです。

このとき、私は卒業生に、率直に「ありがとう」と言うようにしています。なぜならば、私は彼ら・彼女らの受信によって、利他の主体に押し上げてもらっているからです。私の言ったことは、大した内容ではありません。しかし、卒業生はその言葉を言葉以上のものに昇華し、自分の人生を切りひらいています。そして、時間が経って成熟したとき、その言葉を彼ら・彼女らの活躍と共に、私に返してくれます。

利他の構造においては、「発すること」よりも「受け取ること」のほうが、⑨積極的な意味を持つのです。——自己が受け手になること。そのことによつて、利他を生み出すこと。

これは前章で論じた「※与格」の構造と通じています。受け手にとつて大切なのは、「気づく」ことです。私たちには、過去から多くの言葉や行為がやって来ます。しかし、残念ながら、そのほとんどを見逃し、つかみ損ねています。しかし、何かがきっかけで、ふと「あのときの一言」に気づかされたとき、言葉や行為が受信され、利他が起動します。

哲学者の近内悠太は、贈与について「被贈与の気づきこそがすべての始まりなのです」と述べています。まさにその通りだと思います。「被贈与の気づき」こそが贈与の始まりであるという構造は、利他と全く同じだと言えます。

——中島岳志『思いがけず利他』による——

(注)

※「ちばる食堂」や「NHKのど自慢」：認知症の人が働く「ちばる食堂」の経営者や「NHKのど自慢」で伴奏する

バンドのミュージシャンは人の働く能力や歌い手の個性を引き出していると、例を通じて本文で紹介されている。

※与格：間接目的であることを示す格。

問一 傍線部①『利他を受け取る』とはどのような状態なのでしょうか」の答えになっている部分を文中から三十字以内で探し、「く状態。」に続くように抜き出しなさい。

問二 傍線部②「この贈与は負債感につながることはありません」とあるが、その具体例として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人からのプレゼントは趣味の違いがあるのであまり欲しいものはもらえないが、相手の気持ちを考えて喜んで見せなくてはならないと思う。

イ お互いに誕生日プレゼントを交換している友達がブランド品をくれた場合、自分も相応の高額なものを贈らないといけな
いという気持ちになる。

ウ 友達から旅行に行くので欲しいお土産はないかと聞かれたが、どのくらいの金額のものを頼んでいいのかわからないので「何でもいい」と答えがちである。

エ 展示会に行くとき、あまり付き合いない人からグッズの購入を頼まれ間違って買ってしまった場合、代金を請求しにく
くなってしまう。

問三 傍線部③「プロセス」と同じ意味の熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 結果 イ 要因 ウ 心情 エ 過程

問四 傍線部④「あまりにも悔しくて、目から涙がこぼれました」とあるが、筆者が悔しがった理由として適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生がけんか相手の上級生の話だけを信じたから。

イ けんか相手の上級生に非があるのに謝らされたから。

ウ 同級生の態度が自分の味方かどうかはつきりしなかったから。

エ 周囲の人たちが最後まで見て見ぬふりを通したから。

オ みんなの前でひどく叱られたから。

カ みんなの罪を一人で背負わされたから。

問五 (Ⅰ) (Ⅲ) に入る二字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。
ア 権力 イ 反論 ウ 暴力 エ 知性 オ 努力 カ 合意

問六 傍線部⑤にある「私の潜在的なものを引き出してくれた」とはどういうことか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人には負けない強さが私の中にはあり、先生がそれを指摘してくれたということ。
イ 休部状態の部活動を立て直すやりがいに、先生が気づかせてくれたということ。
ウ 学問の魅力と研究に没頭する楽しさを、先生が私に教えてくれたということ。
エ 腕力ではなく学力で優位に立つ機会を、先生が与えてくれたということ。

問七 空欄 A 〓 C に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。
ア つまり イ なぜなら ウ しかし エ そして

問八 傍線部⑥「タイムラグ」の意味を、これより後の文中から探し、七字で抜き出さない。

問九 傍線部⑦「私たちは、与えることによって利他を生み出すのではなく、受け取ることで利他を生み出します」とあるが、それはどういうことか。筆者の体験した「あのときの一言」の例に即して、五十字以内で説明しなさい。

問十 傍線部⑧「キツネにつままれたような表情」とあるが、これはどのような様子か。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア だまされたことに驚く様子。 イ 予期せぬことに啞然とする様子。
ウ 痛みに対してひるむ様子。 エ 意外な指摘に慥然とする様子。

問十一 傍線部⑨「積極的な意味を持つ」とあるが、これを説明した次の文に入る語を文中から探し、それぞれ九字で抜き出さない。

発する側にとっては (1) であっても、受け取る側がその (2) 受信することで利他が生み出されるため、受け手のとらえ方に重要性があるということ。

「三」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の朔ヶ崎怜花は看護師を辞めてから就職活動を始められないでいる。そんなある日、弟佑樹がご近所に住む樋口さんから猫のルナを預かったが、本人は劇団ホルスでの活動が忙しくその世話を「私」に押し付けてきた。この場面は「私」がインターネットで見つけた指輪にひかれ、製作者であるminaさんにメールで購入の問い合わせをした後の話である。

人の世話をすることが、好きだった。その人が喜んでくれるのが嬉しかった。

でも①「世話をする」ってどういうことだろう。

人間じゃなくても、たとえば猫の。

ルナが自分ではできないことを、私が代わりにやるってことだろうか。キャットフードをお皿にあけることや、トイレの砂を替えることや。

でも、ルナも私にできないことをしてくれている。そのやわらかな体を私にくっつけてくれるだけで、こんなにもなぐさめられる。自分で自分を抱きしめることなんかできないのだ。

でもそれが「世話」とか「助ける」ということなのかは、私にはわからなかった。

そのときパソコンからピコッと音がした。メールの着信だ。

早くも、minaさんから返事がきていた。

「朔ヶ崎怜花様

お返事ありがとうございます。

四十九ミリということで、承知しました。サイズは九号になります。

商品到着後、リサイズのご要望がございましたらどうぞお気軽にご連絡ください。」

九号。そうなんだ。私の右手薬指のサイズは、九号。

それがわかっただけでも、指輪を買うという新たな試みをしてよかったと思った。

minaさんのメールは続く。

「朔ヶ崎様の初めてお選びになったアクセサリーが※『朔』であったことを、大変光栄に思います。どうもありがとうございます。ございました。」

これは私自身、うまく説明できない感覚なのですが、アクセサリーを作っているときもうすでに誰のもとに届くのか決まっているような気持ちになります。②お顔がわかるわけではないのに、その作品を手にする方のことをいつも思うのです。

このたび、私を通してこの指輪を朔ヶ崎様のお手元にお送りできることが嬉しくてたまりません。

今回使用したブラックムーンストーンは、私も、初めて目にしたときにハッとするような存在感がありました。見えないはずの新月を形にしたら、おそらくこんな感じだと思わずにいられないほどに。」

そこまで読んで、私は軽く息をついた。

『朔』が最初から私のもとに届くと決まっていたという話が、信じられる気がした。だって、ここに至るまでの何もかもが、あまりにも出来すぎている。

「すべてをゼロから始めるのも素晴らしいことですが、リセットという新しいスタートもあると思います。新月も、まったく新しい天体になるのではなく、③の繰り返しです。この指輪が朔ヶ崎様のお心を穏やかに、そして少しでも勇気づける手助けとなりますよう、願っています。mina」

……リセット。その言葉は私の胸にしみた。

何か、目覚めたような気持ちだった。ヒントをもらったみたいだな。

顔もわからないまま私に寄り添ってくれるminaさんは、④まるで朔そのものだった。

そして「手助け」という文字に、何度も目を合わせる。指輪が、人を助ける？

翌日の夕方、樋口さんが突然帰ってきた。

お土産の紙袋を三つ抱えて。

どうぞ、と私は樋口さんを家に招き入れる。彼女は私が出したスリッパに足を入れながら「ルナく！」と大声で呼んだ。その声を聞いてルナが居間からひよこりと顔を出す。樋口さんはルナを抱きかかえ、ほおずりをした。私はお茶を淹れるために台所に立った。

樋口さんの持つてきてくれたお土産は、どれも近所の洋菓子屋やフルーツショップのものだった。

「旅行、いかがでしたか」

麦茶の入ったグラスをふたつお盆に載せ、居間に向かいながら私がそう言うと、樋口さんはルナを抱いたままちよつと首をすくめた。

「……旅行、つていうかね。ごめん、友達の家に行つてたの。結婚する前、近所だった仕事仲間んだけど」

「家に？」

「うん。突然電話がかかってきて、すぐく落ち込んだの。五十歳間際で、いきなりの失恋とリストラのダブルパンチよ。彼女にしてみれば、大事なものを全部失ったような気持ちになっちゃったのね。それで私、いてもたってもいられなくなって、すぐに行くから、あんたが泣きやむまでそばにいるから待ってなさいって叫んで電話切っちゃったの。ルナも連れていこうと思っただけど、そういえばあの子のマンション、ペット禁止だったって気がついて」

すごい行動力だ。

⑤ こんな友達がいたら、さぞ心強いだろう。私は言った。

「とにかく、何かしてあげたいって気持ちだったんですね」

樋口さんは、さらつと首を横に振る。

「ううん、私には何もできないわよ。恋人とよりを戻させることも、リストラを止めることも。だけど、私があるよってことだけ、知ってほしかったの」

ルナがちよつと体をよじらせた。樋口さんはルナを床に下ろし、のんびりした口調でほほえんだ。

「悩んでるときって、自分を見失ったりするじゃない。私があるよってというのは、あなたがいるよって伝えるのと同じことだと思うの。彼女を想ってる私の存在が、彼女の存在の証あかしになるんじゃないかって」

⑥ 私があるよというのは、あなたがいるよと伝えること。

そんなふう考えたことがなかった。

そうかもしれない。あれこれ考えて特別なことをしなくても、ただそれだけで、人は自分を取り戻せるのかもしれない。麦茶のグラスをぼんやり見ながら、私は言った。

「…………お友達は、泣きやみましたか」

「うん、とりあえずはね。一緒に泣いて、男や会社の悪口言いまくって、思いっきりカラオケして、料亭で美味しいもの食べて、温泉施設で一日過ごして。まあ、それくらいじゃ傷がふさがるわけないし、また泣くんだらうけどね」

樋口さんは麦茶をおいしそうに飲む。

「前は歩いて五分の距離に住んでたしふたりとも独身だったから、しょっちゅう会えてたんだけど。でも離れても、今はこの距離があるよね。たまに会うからこそ話せることもあるし、お互いの変化が前よりもわかりやすくなったり」

それを聞いて私は、※タケトリ・オキナの配信を思い出した。

⑦ 少しづつ離れていきながらも、そのときのお互いが一番合った状態で関わっている月。

もしかしたらそれは、人間関係にも通ずることなんじゃないか。そして、仕事にも。

それまでと同じ環境じゃなくても、軸を変えずに違う立ち位置でやれるのがあるのかもしれない。

樋口さんは顔を少し傾けた。

「でもそれで朔ヶ崎家には迷惑かけちゃって、ごめんなさい。本当にありがとう。怜花ちゃんがいてくれて、すごく助けられた。

私もルナも、友達も」

「いえ、私はお友達のことはべつに…………」

「ううん、怜花ちゃんは間接的に、会うこともなく私の友達のことも助けたのよ」

それを言うなら。

私も、樋口さんに助けられた。この数日、ルナと過ごさせてもらえて。

ということとは、つまり私は、間接的にお友達にも助けられた…………？

そう思ったとき、樋口さんが突然、「あ」と声を上げた。

すぐそばの壁に貼られた劇団ホルスのチラシに顔を寄せる。

「公演、行ったの？」

「あ、父と母が」

「佑樹くんのおかげで、私もダンナも劇団ホルスの大ファンよ。ほとんどマニア」

私は一度も行ったことがないので、ちよつと気まづくなって口を閉じる。樋口さんは、はしゃぐように言った。

「佑樹くん、ホントにすごいわよ。神城龍かみしろりゆうに認められたんだもんね。あの人、優しいキャラだけど芝居のこととなるとすごく厳しいのよ。せっかく入団してもみんなバタバタ辞めていくんだから。ここで生き残っていけるのなんて、ごくごく一部」

⑧……………そうだったのか。

私は胸の奥がA締め付けられる気がした。

いつも楽しそうな佑樹。愚痴のひとつも言わない佑樹。

私が見えないところで、彼はどれだけ努力していたんだろう。

人を支えたいとか助けたいとか思いながら、私は家族である弟のことを思いやっっていなかった。

私は軽く頭を振った。

もう、卑屈ひくつになるのはやめよう。

佑樹にちゃんと、おめでどうって言おう。がんばったねって。

ついでに、自分の服の洗濯ぐらい自分でしなさいよって、明るく言おう。

不満に思いながらB黙って洗濯機を回すよりも、そのほうがずっといい。

ルナが樋口さんの隣に座り、C尻尾を揺らしながら私を見た。

目と目を合わせ、私は心でルナに伝える。ありがとう。本当に、ありがとうね。

そして樋口さんのほうに顔を向けて言った。

「⑨またいつでも声かけてください。ルナと仲良くなれて、楽しかったです」

「本当に？　ありがとう、嬉しいわ」

樋口さんはばあつと明るい笑みを見せる。そして穏やかに、こう続けた。

「ルナを預かってほしいって佑樹くんにお願ねがいしたときね、彼、こう言ってたの。姉ちゃん、なんだか落ち込んでるみたいで、ル

ナが家にいたら元気になるかもって。はつきりは言わないかもしれないけど、佑樹くんなりに怜花ちゃんのこと想ってるのよ」

それから二日して、私のもとに『朔』が届いた。

ていねいに梱包こんぽうされたラッピング。カードに添えられたminaさんの手書きの文字。

彼女はパソコンの中ではなく現実世界にいるのだと、当たり前前にことに感動した。右手の薬指に指輪をはめる。ぴったりだった。

ブラックムーンストーンもワイヤーも、写真で見るとより美しく感じた。

間違いなく、これは私の指輪だ。予定どおり、私のところに来てくれた。

D 心が上向きになる。私はもう大丈夫だという根拠のない強さが生まれる。

何も言わない、動くこともない指輪のサポートを、私は確かに感じた。

私は指輪を見つめながら、自分に問いかける。

私のやりたいことは……やりたいことは。

あなたは会うこともなく人を助けたのだと言ってくれた樋口さんの笑顔が浮かぶ。

私もminaさんのように、誰かの朔になれるだろうか。

真つ暗な夜空の向こうで、⑩月は何億回目のリセットをしたのだろう。

私はノートパソコンで就職情報サイトを開き、探し始める。

並んでいる職種のバナーにカーソルを当てるのは「医療系」の文字。

現場にまた同じように戻るの、やっぱりまだ踏み出せそうにない。

でも病院に勤める看護師じゃなくなったら、幅広く調べれば、これまでの経験が生かせる仕事があるかもしれない。探してみよう、やってみようと思った。

今は今の距離で、今の私にできることから。

— 青山美智子『月の立つ林で』による —

(注) ※『朔』……ここではアクセサリーの名前であるが、「朔」には「始まり」という意味があるため新月の異名として「朔月」という言い方がある。

※タケトリ・オキナ……ネット上の無料音声コンテンツで『ツキない話』というラジオのような番組のパーソナリティ。

問一 傍線部①『世話をする』ってどういうことだろう」とあるが、主人公が疑問を持っているのはどのような点か。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人の「世話をする」ということは、私がこれまでにしてきた認識でいいのかということ。
- イ 人間を「世話をする」ことに対し、猫の場合は具体的に何をすることなのかということ。
- ウ 自分ができないことを代行するのが、「世話をする」ということになるのかということ。
- エ ルナが私に寄り添ってくれることは、私を「世話をする」ことに当たるのかということ。

問二 傍線部②の「顔」がここで意味するものとして当てはまらないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 考え イ 好み ウ 人柄 エ 身元
- ア 再現 イ 再発 ウ 再会 エ 再生

問三 ③に入る語句として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部④「まるで朔そのものだった」とあるが、これはどのようなことを言っているのか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 特別な力を持つ『朔』の存在と、それが誰の手元に届くかを見抜いてしまうminaさんの存在が重なるということ。
- イ ブラックムーンストーンの存在感は、すでに私の大きな心の支えになっているminaさんそのものということ。
- ウ 『朔』が私を勇気づけてくれる存在であると同時に、minaさんも私を支える大切な存在であるということ。
- エ 私を手助けしてくれる指輪と、私に寄り添ってくれるminaさんはどちらもリセットするのに必要だということ。

問五 傍線部⑤の「友達」はどのような「友達」を指しているか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 心に浮かんだことをすぐに実行に移せる行動力のある人。
- イ 人に何かをしてあげたいという奉仕の心を持っている人。
- ウ 気持ちが落ち込んでいる時にすぐに助けに来てくれる人。
- エ 話をよく聞き、複雑な立場を理解して同情してくれる人。

問六 傍線部⑥「私がいるよというのは、あなたがいるよと伝えること」とあるが、それはどういうことか。文中の語を使って五十文字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑦「少しずつ離れてく関わっている月」とあるが、ここではどういうことを言っているのか。次の空欄に入る語句を指定された字数で答えなさい。

月と(1)2字が角度や距離を変えるのと同じように、樋口さんとそのお友達も(2)6字でお互いに一番合った状態で関わっているということ。

問八 傍線部⑧「……………そうだったのか。」とあるが、ここで「私」が気づいたことを二十五字以内で探し、「くということ。」に続くように抜き出しなさい。

問九 傍線部⑨「またいつでも声かけてください。ルナと仲良くなれて、楽しかったです」とあるが、ここでの怜花の気持ちを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長い間預かっていた猫との別れは寂しいが、それ以上に世話から開放される喜びを強く感じている。

イ ルナとの出会いや樋口さんとの話で気持ちが整理されつつあり、すがすがしさを感じている。

ウ 旅行だと嘘をついていた樋口さんは信頼できないので、上辺だけの付き合いをしようかと割り切っている。

エ ルナと離れたくないがそれを直接は言にくいので、それとなく伝えようと必死になっている。

問十 A B C Dに入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。

ア むすつと イ ぐつと ウ ぎゅつと エ ゆらりと オ つるりと

問十一 傍線部⑩「月は何億回目のリセットをしたのだろう」とあるが、これは現実的にはどのような現象に対する比喻か。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 月の自転 イ 月の公転 ウ 満月 エ 新月

【二】

相手の行為によって自己の能力が引き出され、主体性が喚起された状態

イ

イオ

A カ B ウ C エ

ウ

ウアエ

時間的な隔たり

先生から発信された時ではなく、十年以上経って筆者に受け取られた時、利他が起動したということ。 46

イ

(1) 日常の何気ない一言 (2) 思いや意図を超えて

【三】

ア

ウ

ウ

エ

彼女を想ってる私の存在があるということは、そこにいる彼女の存在を証明することになるということ。

地球 違う立ち位置

私は家族である弟のことを思いやっていたいなかった ということ

イエ

【差し替え候補】

一

問六 傍線部⑤にある先生が引き出してくれた「私の潜在的なもの」とはどういうことか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人には負けたくないという意地。
- イ 休部状態の部活動を立て直す根気。
- ウ 学問と研究に自ら没頭する探究心。
- エ 腕力を使わずに優位に立つ学力。